

これから紹介する仏陀と弟子とのエピソードは、本号のテーマ「心の整理」を考える上で示唆に富んだ内容です。

仏陀には周りから頭が悪く、愚かだといわれていた周利という弟子がいました。

日頃から、他の弟子達にバカにされてきた周利は自身の愚かさを嘆き、仏弟子をやめるために仏陀のもとを訪ねて伝えます。

「私はあまりに愚かなので、もうこれ以上修行を続けることはできません」

思い悩む周利を見て仏陀は言います。

「自分のことを愚かだとわかっている者は愚か者ではない。本当の愚か者とは、自分を賢いと思いついてる者である」

仏陀は弟子を諭すように言葉を続けます。

「ところでおまえの好きなことはなんだね」「はい、私は掃除が好きです」「そうか。

では、^へ塵を払い、垢を除かん」と唱えながら、ただただ一心に掃除に取り組むがよい」

「はい、わかりました」

その後、周利は仏陀に言われた通りに「塵を払い、垢を除かん」と唱えながら、半年、一年、二年、五年、十年と来る日も来る日もひたすら掃除を行ないました。

やがて長い年月が経ち、周利の周辺に変化が生じてきました。

まず身の回りが清まり、それに伴う「場」や「物」が整ったのです。これは掃除のものが本来の働きといえるでしょう。

そして、何より周囲の人の心を変えていきました。地道に一つのことをやり遂げる周利の姿勢を見て、当初、軽蔑していた他



一心になって物事に取り組み 自らの境遇を切り拓いていく

の弟子達が、彼に一目置くようになり、心から尊敬するようになったのです。そして、ついには仏道修行の最終目的である「悟り」の境地に周利は到達したのでした。

ある日、仏陀は大衆を前に言いました。

「悟りを開くということとは、何も多くの知識を得ることではない。たとえ小さなことでも、地道に行なうことが大切なのだ」

私たちが学んでいる純粋倫理では、「一度こうと目的を定めたら終始一貫やってやりぬくこと」の大切さが説かれていま

す。そして、先の逸話においても焦点となつているのは、愚直なまでに一つのことをやり遂げる周利の姿勢そのものでした。

周利は当初、何事にも消極的で、憂いや悩み、恐れといった負の感情に支配され、心の整理が出来ていない状況だったといえるでしょう。

そうした中で、その消極的な心を払拭するかのうちに、仏陀は「一心」になることを促しました。周利は「自分に今できること、何をなすべきか」に気づき、地道に物事に取り組むことで心が整理され、積極的な姿勢へと変わったのです。

一心とは、^へ何のこだわりも不足もなく、澄みきった張りきった心であり、純粋倫理でいう「純情（すなお）」に近い言葉とも言えます。

岐路に立った時、まずは負の感情を伴う私情雑念を捨てて「一心」になって物事に取り組んでみましょう。その実践によって、心が整理され、明朗闊達な心境に達すれば、境遇は自ずから切り拓かれていくのです。